

地域情報（県別）

【埼玉】創業50年超で閉院が決まった産婦人科医院を承継-檜垣博・かわぐちレディースクリニック院長に聞く◆Vol.2

無痛分娩の立ち上げや、立ち会い帝王切開を広めるべく全国の施設に協力

m3.com地域版

医療法人社団紡世会かわぐちレディースクリニック（川口市）は、50年以上続いた産婦人科の閉院を受けて2018年に院長の檜垣博氏が承継したクリニックだ。「安全・安心で優しいお産が、育児のスタートを支え、地域を元気にする」との考えのもと、完全24時間365日の無痛分娩、家族立ち会い帝王切開、産後ケアまでを一貫して整備している。同氏に、これまでの歩みと地域医療に身を置いた理由、無痛分娩の地域での普及などについて聞いた。（2026年2月24日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)



檜垣博氏

「手術室で拍手が起こるなんて！」産婦人科医になると決めた瞬間

——檜垣先生が産婦人科医の道を選んだ理由は何ですか。

父親が整形外科医で、当初、私も整形外科や救命医療に進むことを考えていました。転機となったのは、学生時代に見学した帝王切開です。緊急帝王切開で緊迫した雰囲気の手術室に、赤ちゃんが産声を上げた瞬間、響き渡るような大きな拍手が沸き起こったのです。「手術室で拍手が起こるなんて！」と、言葉にできないほどの衝撃を受けました。

それまで、病院とは「マイナスの状態をゼロに近づける」ための治療の場と思っていました。しかし、新たな命が誕生するという圧倒的な「プラスの瞬間」を目の当たりにし、産婦人科医の道へ進むことを決意しました。この感動を伝える周産期医療こそが、私の生涯をかける仕事です。

——いつから地域の周産期医療に携わることを考えはじめましたか。

産婦人科医になることを決意し周産期医療を一生の仕事にしようと決めた時、いずれは地域の産婦人科医になると考えていました。私の祖父は広島で産婦人科を開業していたので、地域のお産を支えていた祖父の姿が、どこかで私

の原風景になっていたのかもしれませんが。

——前身の渋川産婦人科を承継した経緯を教えてください。

今、地域ではお産ができる施設が次々と減っています。この川口市も例外ではありません。かつては市内に数多く存在した分娩取扱施設も、現在は総合病院が3施設、個人の有床診療所が4施設のみとなっています。当院の前身である渋川産婦人科医院も、1967年の開設から50年以上が経過し、設備の老朽化により2018年には閉院が決まっています。地域でお産ができる場所がまた一つ失われてしまう。その状況を前に「なんとしても残したい」という思いから、同年に同院を承継。イオンモール川口前川の近くに移転し「前川レディースクリニック」として診療を紡ぎました。その後、2020年4月に隣接地に「かわぐちレディースクリニック」を建設し、分娩を再開しました。

法人名である「医療法人社団紡世会（ほうせいかい）」には、世代を紡ぐこと、そして地域や世の中を紡ぐこと、その二つの思いを込めました。新しい命の誕生は、世代を紡いでいく営みです。そして、安心して生み育てられる環境を守ることは、地域の未来を紡ぐことでもあると考えています。優しいお産を通して、お母さんから赤ちゃんへと命のバトンが受け継がれ、ご家族や地域のつながりが紡がれていく。その拠点として、安心して赤ちゃんを産める場所を守り残していきたいと考えています。

地域でお産ができる場所を守るだけでなく、出産の体験そのものを大切にしたいと考えています。その一つとして取り組んでいるのが無痛分娩です。24時間365日安全に提供できる体制を整備しています。私が考える優しいお産とは、単に痛みが少ないことではなく、妊婦さんが安心して出産に向き合い、「幸せなお産だった」と感じられる体験であることです。その温かな記憶が、その後の子育ての日々を支えると考えています。

安全なお産を広めるべく、他院に入り込み、無痛分娩などの立ち上げ段階から伴走

——先生のお考えの原点となった出来事やきっかけがあれば教えてください。

医師7年目の頃です。専門医を取得し、次のステップを考えるために、臨床の場だけでなく地域を知ろうと、さまざまな場所を見て回っていました。その時、乳児院を訪れる機会がありました。家庭で育てることが難しい事情を抱えた赤ちゃんたちが過ごす場所です。子どもたちの表情を見た時、「笑顔が少ない」と感じ、その姿が強く心に残りました。

同じ時期、ネグレクトによって命を落とす子どものニュースが相次いでいました。報道を見るたびに、やり場のない憤りを覚え「だったら子どもを自分に預けてほしい」と思うほどでした。そして、お母さんと子どもを守るには、医療だけでは足りないのではないかと考えるようになりました。ネグレクトを一人も出さないためには、安心して産み、育てられる環境や、家庭が孤立せず、困った時に支えが届く地域の仕組みこそが必要なのではないか。そう考えるようになったところに、渋川産婦人科医院の閉院を耳にして承継につながりました。

——家族立ち会い帝王切開だけでなく、無痛分娩の普及にも力を入れているそうですね。

安全なお産は、特定の施設だけで実現すればよいものではなく、地域全体で提供できる体制づくりが重要です。その思いから、私たちは地域の分娩施設に対し、主に「無痛分娩の安全な導入」と「立ち会い帝王切開の普及」の二つの軸で支援に力を注いできました。

特に無痛分娩への関心が高まる中、技術や体制が十分に整わないまま導入が進めば、患者さんに不利益が及ぶ恐れがあります。例えば東京都では、助成制度などを背景に急速に導入が広がる動きもあり、安全管理体制や人材育成が追いつかないことへの懸念もあります。だからこそ、私たちは単にノウハウを伝えるだけでなく、地域の施設へ足を運び、立ち上げ段階から現場に伴走し、安全な運用ルールが定着するまでスタッフ教育に深く携わっています。その結果、今年地域で無痛分娩を取り入れる施設が増え、24時間体制で提供できる施設も2カ所となりました。

また、もう一つの取り組みである「立ち会い帝王切開」についても普及支援を進めており、本年度中にスタートを予定している施設もあります。こうした現場に伴走する取り組みこそが、結果として患者さんの安心と利益を守る道だと考えています。

「産前・産後、そして地域へ。ご家族の歩みに途切れることなく寄り添い続けるために」

—現在感じている課題があれば教えてください。

妊婦さんに安心をお届けするには、まずスタッフが安心して力を発揮できる働きやすい環境が不可欠です。スタッフがやりがいを持ち、生き生きと働いていることが、そのままお母さんたちへの温かなケアにつながると考えています。産科は昼夜問わず、緊急対応も多く、身体的・精神的な負担が大きい分野です。だからこそ、スタッフが安心して働き続けられる環境を整えることは、大きな課題でもあります。

正直に言えば、高い技術と専門性を持つスタッフを多数配置し続けることは、経営面において決して容易なことではありません。しかし、その手厚い体制こそが、妊婦さんにとって「一番安全で安心する環境」をお約束する方法だと信じています。

—今後の展望や、予定している取り組みがあればお聞かせください。

今後は産後のケアにもさらに力を注いでいく予定で、隣接地に産後ケア施設「マタニティケアホームつむぎ」を開院しました。お産を終えたばかりのお母さんは、心も体もとてもデリケートな状態なので、安心してゆっくりお休みいただける環境が重要です。スタッフが赤ちゃんを大切にお預かりし、その間、お母さんにはこだわりの美味しい食事をゆっくりと味わっていただき、心置きなくぐっすりとお休みいただく。心身の回復を優しく支える場所でありたいと考えています。



入院中に提供する食事（和食）



孤立しにくい地域づくりを目指し、地域に向けた産後学級の拡充を行っています。現在は産後3カ月、6カ月、そして1歳を迎える時期に、同じ月齢のお子さんを持つ保護者の方々が出会い、悩みを共有できる場を設けています。この取り組みの背景には、コロナ禍で地域のつながりが絶たれ、一人で追い詰められていくお母さんたちの姿を目の当たりにした経験があります。私たちが提供する場をきっかけに新たな交流が生まれ、地域のあたたかいネットワークの礎となれるよう活動を続けていきます。

また、妊婦さんが大きなお腹でもご負担なく、お買い物やお出かけのついでに通えるよう、新たに浦和駅に直結する場所に妊婦健診専門のクリニックを2026年7月に開設する予定です。地域の皆さまの生活のすぐそばで、妊娠中から産後まで、ご家族の歩みに途切れることなく温かく寄り添い続けられる。そんな安心できる環境を、これからも丁寧に作り上げていきたいと願っております。

——地域で産科に携わる医師や医療者に向けて、メッセージをお願いします。

産科は、昼夜を問わず赤ちゃんのペースに合わせるため、大変なことも多い現場です。でも、新しい命の誕生に立ち会い、ご家族のほころぶような笑顔を直接見ることができます。その瞬間は本当に温かく、何ものにも代えがたい喜びがあり、大きなやりがいを感じます。

若い先生方に伝えたいのは、「一人で頑張りすぎないでほしい」ことです。産科は、妊婦さんとそのご家族を中心とした多職種でのチーム医療です。医師、助産師や看護師、事務など、みんなで支え合うチームをつくり、スタッフ一人一人が笑顔で働ける職場をつくっていくことができれば、安全なお産と仕事としてのやりがいは必ず両立できます。ぜひ一緒に、これからの地域のお産を優しく支えていきましょう。

◆檜垣 博（ひがき・ひろし）氏

2002年、帝京大学医学部卒業。同大学医学部附属病院 産婦人科勤務。2004年から総合母子保健センター愛育病院産婦人科で長年研鑽を積み、蕨市立病院産婦人科で地域医療に従事。麻酔科医としても、埼玉大学国際医療センター 麻酔科、総合母子医療センター愛育病院などを歴任。2020年4月より「かわぐちレディースクリニック」を開院し、現職。愛育病院麻酔科非常勤。日本専門医機構認定産婦人科専門医。麻酔科標榜医。母体保護法指定医。東都大学臨床教授。埼玉県産婦人科医会理事。NCPR（新生児蘇生法）インストラクター。J-MELS（母体救命）インストラクター。

【取材・文＝神田未和（写真はクリニック提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

